

厚生労働省科学研究費補助金
長寿科学総合研究事業

平成 16 - 17 年度 総合研究報告書

従来型施設における痴呆性高齢者環境支援指針の適用による
環境改善手法の開発と効果の多面的評価

平成 18 年 3 月

主任研究者 足立 啓

和歌山大学システム工学部教授

目 次

I. 総括研究報告

- 従来型施設における痴呆性*高齢者環境支援指針の適用による環境改善手法の開発と効果の
多面的評価 1
主任研究者 足立 啓 和歌山大学教授

II. 分担研究報告

■テーマ1：従来型施設におけるユニットケアの実態と環境改善手法

1. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケアの実態に関するアンケート調査
足立啓・林悦子・品川靖幸・三菱総合研究所 17
(資料) 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケアの実態に関するアンケート
調査用紙【調査票A・B】
2. 従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践の現状把握と環境改善手法の検討
足立啓・品川靖幸・安岡真由・郡山智彦・池本博行 38
3. 従来型施設のユニット化におけるコスト事例の検討
池本博行・足立啓・品川靖幸・郡山智彦 56

■テーマ2：従来型施設のユニット化研修プログラムと環境改善のプロセス

4. 従来型施設を対象とした認知症ケア研修プログラムと環境改善の多面的評価
(その1) ー研修プログラムの構築と同マニュアル作成ー
門林加奈子・黒田研二・佐瀬恵美子・坪山孝・足立啓 65
5. 従来型施設を対象とした認知症ケア研修プログラムと環境改善の多面的評価
(その2) ー研修プログラムにおける施設キャプション評価ー
足立啓・岩本明日香・安岡真由・郡山智彦・品川靖幸 71
6. 従来型施設を対象とした認知症ケア研修プログラムと環境改善の多面的評価
(その3) ー参加者の最終論文にみる研修の効果と気づきー
佐瀬恵美子 77

*本研究の主題における「痴呆」は、本文では「認知症」としている。

7. 従来型特別養護老人ホームにおける環境支援指針（PEAP）適用による環境づくり （その1）－和歌山県下の施設を事例として－ 足立啓・林田大作・重田洋志・土居加奈子・豊田学	91
8. 従来型特別養護老人ホームにおける環境支援指針（PEAP）適用による環境づくり （その2）－和歌山県下の施設環境改善の取り組みシステム－ 足立啓・岡田祐介・土居加奈子・林田大作	103
■テーマ3：従来型施設における環境改善に伴う高齢者および職員の環境行動	
9. 従来型特別養護老人ホームの環境改修の有効性に関する研究 －認知症高齢者と介護スタッフの行動変化からみた分析評価－ 森一彦・加藤悠介・今井朗・山崎愛	113
10. 従来型施設における環境改善に伴う高齢者、職員の環境－行動 －家庭らしさ（Homelike）に関する研究－ 赤木徹也・大久保幸積・小山正子	141
11. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境整備継続の研究 （その1）－介護職員のストレスとバーンアウトの視点から－ 田辺毅彦	150
12. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境整備継続の研究 （その2）－介護職員のストレス・アレンジメント－ 田辺毅彦	155
13. 従来型特別養護老人ホームJ施設の事例調査 （その1）－ユニットケアの導入に伴う環境改善の経過と評価－ 林悦子	160
14. 従来型特別養護老人ホームJ施設の事例調査 （その2）－心身機能別にみるユニットの環境改善と生活、ケア行為の実態、課題－ 林悦子	172
■テーマ4：高齢者施設における感染管理	
15. 特別養護老人ホームにおける感染管理の実態把握 －ユニットケア型施設と従来型施設を対象に－ 湯沢八江・松下年子・島田千穂	189

16. 高齢者施設における感染管理の実態と課題

湯沢八江・松下年子・佐々木由恵 196

III. 研究成果の刊行に関する一覧表 205

本研究には以下の別冊がある。

1. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケアの実態に関するアンケート調査
2. 大阪府社会福祉協議会編：認知症ケア研修マニュアル

従来型施設における痴呆性*高齢者環境支援指針の適用による 環境改善手法の開発と多面的評価

主任研究者

足立 啓 和歌山大学システム工学部教授

A. 研究背景と目的

認知症ケアにおける生活環境の重要性がようやく認識されつつある。

特別養護老人ホームにおいては、平成 14 年度から個室・ユニットケア対応のいわゆる「新型特養」が制度化された。個室化によるプライバシーを確保し、小規模でより良い生活環境を形成することによって、認知症の周辺症状を軽減化させ、個別的ケアを指向し、入居者の QOL（生活の質）を向上させる施設整備が行われつつある。

しかしながら全国で 5000 箇所を超える特別養護老人ホームは、4 人室を主とした病院モデルを基本に建設された大規模な従来型施設である。その多くは、建設後 10－30 年を経過し、ユニット化や小規模化の社会的ニーズに対応が困難な場合が予想され、またその実態も十分に把握されていない。

本研究の主な目的は、1) 従来型施設におけるユニットケアの現状や課題を把握し、小規模で個別的対応を可能としうる環境改善手法の開発、2) 従来型施設職員のユニットケアやケア環境改善の研修プログラムを開発し、その多面的評価を試みること、3) ユニット化や環境改善を通じて、環境行動学の視点から、入居者や職員への影響や効果を検証、4) 高齢者施設の感染管理、を明らかにすることである。

B. 研究概要

平成 16、17 年度の研究概要と成果は、以下に示す 4 つのテーマに大別され、合計 16 の分担研究報告から構成される。

■テーマ 1：従来型施設におけるユニットケアの実態と環境改善手法（3 報告）

■テーマ 2：従来型施設のユニット化研修プログラムと環境改善のプロセス（5 報告）

■テーマ 3：従来型施設における環境改善に伴う高齢者および職員の環境行動（6 報告）

■テーマ 4：高齢者施設における感染管理（2 報告）

*本研究の主題における「痴呆」は、本文では「認知症」としている。

■テーマ1：従来型施設におけるユニットケアの実態と環境改善手法

1. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケアの実態に関するアンケート調査

平成16年度、全国の従来型特別養護老人ホーム5216施設を対象に、ユニットケアの実態に関するアンケート調査を実施した。その結果、回答施設の約3割が本調査で独自に定義した従来型施設でユニットケアが実施されており、現状の知見や課題を得ることができた。またユニットケアを実施していない施設でも今後導入していく意向があることが明らかとなった。全国規模でユニットケアの実態や施設の意向、評価等の概要が把握された。

詳細については、別冊報告書としてまとめている。

2. 従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践の現状把握と環境改善手法の検討

平成17年度では、先のアンケート調査を元に、従来型でユニットケアを先進的に行っている30施設に訪問・ヒアリング調査を実施した。

訪問施設の具体的な取り組み内容、共有空間や居室の空間構成、環境整備事例を示すことで従来型施設では既存の建物をうまく利活用し、さまざまな工夫を行うことでユニットケアを実施している現状が明らかとなった。またこれらの現状をふまえ環境整備手法を検討することで、今後のユニット化や環境改善の方向性を示した。

3. 従来型施設のユニット化におけるコスト事例の検討

本調査では、従来型特別養護老人ホームにおいてユニットケアを実施している施設を対象に、ユニットケアの推進及び質の向上を図るため求められる施設改修工事に要したコストを分析し、各施設のユニット化標準的コストを算出した。また、従来型特別養護老人ホームにおけるモデルプランを想定し、従来型特別養護老人ホームをユニット化する場合の標準的改修工事コストを算出し、従来型施設で今後ユニットケアを試みる場合の参考知見をえた。

■テーマ2：従来型施設のユニット化研修プログラムと環境改善のプロセス

4. 従来型施設を対象とした認知症ケア研修プログラムと環境改善の多面的評価

(その1) 認知症研修プログラムの構築と同マニュアルの作成

大阪府社会福祉協議会が主催し、主に従来型特別養護老人ホーム職員(20人)を対象として社会福祉専門ゼミナール「特別養護老人ホームにおける認知症ケア」を実施している。このゼミの特徴として、毎月1回開催し約1年間(計10回)に渡る長期的な研修であること、参加者と学際分野(医療、看護、福祉、環境)の講師陣が対等な立場で意見交換をする場であること、ゼミと並行して個々の施設でケア改善に取り組む、という点がある。

参加者はゼミで習得した知見をできる限り自分の施設現場で実践することをタスクとされる。すなわち、①ゼミ参加→②課題を持ち帰り、施設で実施→③その結果をもとにゼミ内で意見交換→④また課題を持ち帰る、のサイクルを経て、それぞれの施設でケア環境改善を試みる。その内容、方法、進行状況は異なるものの、施設を変革するきっかけとなる。各施設の取り組み内容は、最終回に参加者から提出された論文集としてまとめられる。

この一連の研修プログラムについては、研修用テキスト教材としてマニュアル（別冊）を作成している。このマニュアルが、他府県や他組織における研修にも参考になるよう試みた。

5. 従来型施設を対象とした認知症ケア研修プログラムと環境改善の多面的評価

（その2） 研修プログラムにおける施設キャプション評価

職員のケア環境に対する気づきや認識を明確化、共有化するために、キャプション評価法を用いた。キャプション評価は、施設の良い箇所、改善を要する悪い箇所を、写真に撮り簡単な説明を加える手法である。20施設、230人、総数732例のキャプションを分析した結果、良い評価が全体の35%、改善を要する悪い評価が65%であった。共有空間、トイレ、廊下、居室の順に要改善箇所が多い。一部に施設長と現場職員では評価が異なり、意識の相違も見られたが、キャプション評価を実施することで、現場のケア環境に対する認識を高め、改善に対する意識を共有しうる有効な手段となることが示唆された。

6. 従来型施設を対象とした認知症ケア研修プログラムと環境改善の多面的評価

（その3） 参加者の最終論文にみる研修の効果と気づき

大阪府社会福祉協議会の認知症研修の参加者は平成16年7月から平成17年5月までの約1年間を通して様々な視点から学習を深めた。事前学習として文献学習やビデオ視聴を行い、研修では参加者間の意見交換、グループワークを実施して学びを深めてきた。研修では単なる学びで終わることなく、所属する施設のキャプション評価、改善計画、改善の取り組みを同時に実施し、最後に1年間の研修を締めくくる課題として16編の論文が提出された。その論文を元に研修の取り組みとその効果について分析した。参加者はハード、ソフト両面のケア環境改善に取り組み、その結果、様々な効果や変化を経験し課題を整理している。また、その過程の中で多くの気づきを得ている。それらの成果は、今後の認知症高齢者ケアの現場で活かされると考えられる。

7. 従来型特別養護老人ホームにおける環境支援指針（PEAP）適用による環境づくり

（その1） 一和歌山県下の施設を事例として一

本研究では、和歌山県下の8施設の環境づくりにPEAP（日本版3）の考え方をを用いて、介入調査を行い、その過程を分析した。調査内容はPEAP研修会、キャプション評価、PEAP評価、アンケート、定点観察の5つである。その結果、①従来型施設の環境づくりは施設

体制の違いにより、その進行度に大きな差がみられた。②環境づくりを業務の一環として
いる施設は PEAP 評価と環境への配慮の実施度が飛躍的に上昇した。その一方で、環境づ
くりに対して特に業務体制のない施設は、研修会を通して環境づくりの変化がみられな
かった。したがって今後は、新しいケア環境を再構築する基盤として、施設の運営体制や環
境づくりに対する施設全体の取り組みが重要であることが明らかとなった。

8. 従来型特別養護老人ホームにおける環境支援指針（PEAP）適用による環境づくり （その2）－和歌山県下の施設環境改善の取り組みシステム－

和歌山県下の従来型 8 施設を対象に PEAP（認知症高齢者環境支援指針）研修会を開催
し、環境づくり支援の介入研究を行った。その結果、環境づくりの取り組みや進捗状況に
施設間で大きな差が見られた。その要因として、環境づくりに対する現場職員の意識共有
の浸透度、幹部職員の環境づくりに対する理解度、業務の一環としての環境づくりの位置
づけ、環境づくりのキーパーソンの有無、などがあげられる。また、環境づくりを通じて
ケア環境を見直すシステム構築の必要性が上げられる。

■テーマ 3：従来型施設における環境改善に伴う高齢者および職員的环境行動

9. 従来型施設的环境改修の有効性に関する研究

－介護スタッフの行動変化からみた分析評価－

本研究では従来型特別養護老人ホーム 2 施設において環境改修の有効性を介護スタッフ
の行動変化より分析評価した結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) スタッフルーム開放とダイニングテーブルや小スペースにあるソファは高齢者と共有の
居場所となり、会話量と見守り量の増加に有効であった。
- (2) 多くの場所を見渡せるキッチンは見守り量の増加につながった。
- (3) 安定的な高齢者のグループ形成を促進する畳スペースや異なる形状、大きさのテーブル
の配置は、高齢者同士の会話行動の増加や無為状態の減少など自発的な行動の増加に有効
で、それに伴いスタッフの負担が減少する傾向がある。

10. 従来型施設における環境改善に伴う高齢者、職員的环境行動

－家庭らしさ（Homelike）に関する研究－

認知症高齢者施設の共用空間をより家庭らしさ（Homelike）を感じさせる環境とするた
めに、介護職員を中心とした心理量調査と居住環境の物理量調査を行い、Homelike を感じ
させる心理的要因とそれに影響する物理的環境要素を検討すると共に、従来型施設におけ
る Homelike の可能性を検討した結果、次のことが明らかとなった。①Homelike を感じさ
せる環境には、なじみ感・生活感・広さ感と言った心理的要因が影響し、広さ感<生活感

くなじみ感の順でその重要度が增加する。②Homelike を感じさせる環境になればなるほど、良い印象を与える物理的環境要素が増加する。③Homelike をより強く感じさせる環境を創造するためには、共用空間の窓側に団欒の場などになりえる居住者や介護職員が集いやすい空間をしつらえるよう、物理的環境要素を計画的に配置することが重要である。そして、その場合、物理的環境要素の種類が不自然に偏らないように配慮することが、その強化につながる。④Homelike を感じさせる環境を創造するためには、居住者のみならず、介護職員の積極的な働きかけが重要である。⑤従来型施設からグループケア導入への移行を試みた施設における共用空間であっても、上記の知見を考慮し、そのしつらえを工夫することによって、Homelike を感じさせる環境の創造が十分に可能であることが示唆される。

1 1. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケア環境整備継続の研究

(その1) 介護職員のストレスとバーンアウトの視点から

既存の回廊型大規模特養ホームをユニットケアに環境移行する際と環境整備の継続に伴う問題点を、ストレスとバーンアウトの視点から検討することを目的とした。調査は、北海道 K 特養ホームで23名の介護職員を対象に、バーンアウトおよびストレス内容とストレス対処について質問紙調査と聴取調査を実施し、結果の比較を行った。その結果、バーンアウト得点とストレス内容得点の増加が見られたが、ユニットケア環境整備を良好に継続するためには、ユニット同士の孤立を解消してコミュニケーションを活性化し、情報交換や職場システムによる問題解決の環境作りを促進することが最も重要であることが示された。

1 2. 従来型特別用語老人ホームにおけるユニットケア環境整備継続の研究

(その2) 介護職員のストレス・アレンジメント

前年度までの研究において、既存の回廊型大規模特養ホームをユニットケアに環境移行することが介護スタッフのストレス低減につながることを示されたが、1年半後には再びストレスが上昇することが明らかとなった。そのため、介護スタッフの勤務体制の変更とGHQを用いた個別のストレス・マネジメントを実施してストレス低減状態を保つ方策を検討した。調査は、北海道内の K 特養ホームで行われ、2005年8月と2006年1月に42名を対象にGHQを実施して、その間にユニット主任の若返り、スタッフ自身による勤務時間管理等を行い、GHQ 評定得点を比較した。その結果、全体としてはストレスの低減が見られたが、ストレスが集中しやすいスタッフやユニットが存在することが確認され、このようなスタッフやユニットの支援およびストレス・マネジメントの継続が必要なことが明らかとなった。

1 3. 従来型特別養護老人ホームJ施設の事例調査

(その1) ユニットケアの導入に伴う環境改善の経過と評価

従来型特養でユニットケアを先駆的に実践している施設を対象に、ユニットケアに至る取り組みと実態を事例調査した結果、第三者からの指摘がユニットケアを始める動機付けとなっており、その後職員の意識改革が行われ、職員による自発的な勉強会・研修、運営者と職員との共同（ボトムアップによる職員の意識反映）によるソフトからの継続的な取り組み、問題解決に向けたハードによる改善（家具、絵画等のしつらえ、改修工事）の積み重ねがユニットケアを実践する上で重要な要件となることが明らかになった。

1 4. 従来型特別養護老人ホームJ施設の事例調査

(その2) 心身機能別にみるユニットの環境改善と生活、ケア行為の実態、課題

築年数が古く、ユニットケアを先駆的に実施している従来型特別養護老人ホームを対象に、高齢者の心身機能別にみたユニットの環境改善、生活およびケア行為についての実態を把握した結果、①各ユニットに共通した課題として、改修した食堂や居間、廊下における生活感のある家庭的な生活空間づくり、②重度認知症ユニット、重介護（ターミナルケア）ユニットにおける変化の富む生活をもたらす空間（台所や喫茶室など）や仕掛け・仕組み（レクなどの活動、外出や散歩、フリーな勤務時間の設定など）の創出、③自立ユニット、認知症ユニットにおける個別ニーズへの対応（人間関係上のトラブルなどを回避）、④プライバシーの確保とコミュニケーションを図るための設備・空間（パーティション、引き戸の設置など）、⑤シーツや布団、オムツなどの収納スペースの確保、⑥ターミナルケアに対応できる空間・設備（経管栄養、吸引装置などを置くスペースと洗浄・消毒するための洗面所）、介護体制（ユニットに医務室や看護室が隣接する、経管栄養による食事時間を共有する）、⑦ケアの効率化（ユニット間でのケアの協力体制、汚物処理室・リネン室などの分散設置）の必要性が示唆された。以上、高齢者の生活を中心とした環境を整えるためには、個別ケアを実現できる環境づくりを基本に、心身機能に対応したハード（物、設備、空間）とソフト（人、仕組み）の改善を行うことが重要であることが示唆された。

■テーマ4：高齢者施設における感染管理

1 5. 特養ホームにおける感染管理の実態把握

ーユニットケア型施設と従来型施設を対象にー

感染管理や予防実態についてユニット施設と従来型施設のスタッフや施設への比較調査を実施した。その結果、予防や早期発見には個別的ケアの重要性、感染症の拡大防止には感染管理の知識習得の重要性などが明らかとなった。またユニットケアでは個別ケアの実現性や感染症発生時に隔離しやすい構造などの利点が示された。また感染症管理マニュアル

ルの開発や研修の重要性が指摘された。

1.6. 高齢者施設における感染管理の実態と課題

本研究では、高齢者施設である介護老人保健施設と介護老人福祉施設における感染管理の実態と課題を把握するために、施設の責任者への半構造的インタビューをもとに、質的帰納的方法により分析を行った。その結果、高齢者施設における感染管理に関する①体制づくりと教育ニーズ、②地域での情報交換と連携、③宿主の課題と個別ケアの3つのカテゴリーが抽出された。高齢者施設の利用者は自立度が低だけでなく医療処置を必要とする易感染状態にある者が多く、感染管理については、感染予防・早期発見・感染拡大防止のスタッフへの教育と、地域全体での感染に関する情報の共有と協力がより必要であり、施設内および周囲からの支援体制づくりの強化が求められていることが明らかになった。

C. 研究成果の発表

研究成果は、国内では、日本建築学会、日本認知症ケア学会、日本老年社会学会で主に発表した。また、国外では、EDRA（環境デザイン学会）、ICG（国際老年学会）などを通じて研究成果を発表した。

本研究に関連する成果発表の詳細は巻末表に示している。

厚生労働科学研究費補助金

長寿科学総合研究事業

従来型施設における痴呆性高齢者環境支援指針の適用による環境改善手法の開発と効果の多面的評価に関する研究

平成16年度～平成17年度 研究成果の概要

主任研究者 足立 啓

新型特別養護老人ホーム(個室・ユニットケア型)

- ・1ユニット(10人前後)で生活が完結
- ・全室個室
- ・家庭的雰囲気



外観

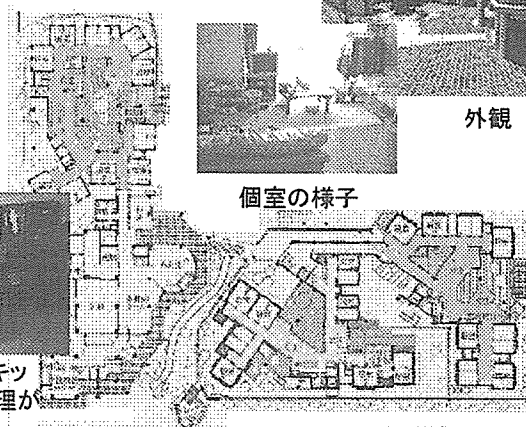


個室の様子



リビングで団樂中の入居者

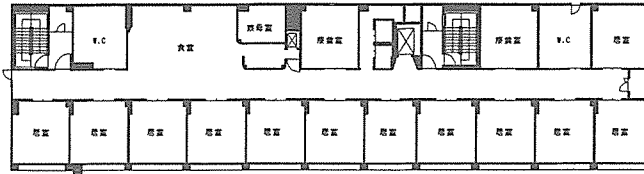
各ユニットにキッチンがあり調理が出来る



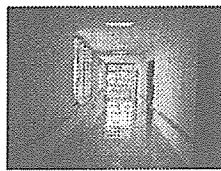
新型施設平面図

従来型特別養護老人ホーム

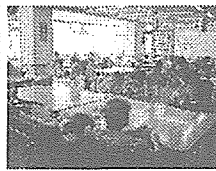
- 特養の大多数(5000施設以上)
- 大規模処遇
- 病院的空間



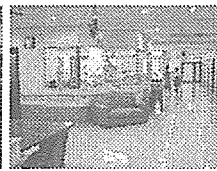
従来型施設平面図



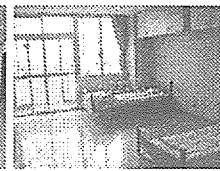
殺風景な長い廊下



日中、大食堂に集められる入居者



フロア全体を監視できる位置に寮母室設置



ベット以外何もない多床室
棚は入居者の手の届かない位置に設置

研究概要(H.16~H.17)

1) 従来型施設のユニットケア全国実態調査 (悉皆アンケート)

- ・ユニットケアの実態、施設の意向、評価等の概要の把握(5216施設)
- ・従来型ユニットケア先進施設への全国訪問調査(30施設)

2) 従来型施設のユニット化研修プログラム実施とマニュアル作成

- ・学際分野(環境、医療福祉、看護、福祉)からの研修プログラムと評価

3) PEAP適用による従来型施設的环境改善への実践介入研究

- ・PEAP(環境支援指針)適用による環境改善取り組みシステムのあり方

4) 従来型施設における環境改善に伴う高齢者、職員的环境行動研究

- ・環境改善の介入研究、肯定的行動変容
- ・「家庭らしさ: Homelike」について環境行動的調査・評価
- ・ユニット化に伴う職員への心理的影響評価(MBI尺度)

5) 従来型施設のユニット化コストの事例評価

- ・ユニット化先進事例の改修、改善コストの事例分析

6) 感染性疾患予防と環境支援との関連評価

- ・効果的な感染管理が可能となる要件

従来型施設のユニットケア全国実態調査

5216施設配布(回収率30.2%:1575施設) 介護保険見直し基礎資料

□ 429施設(約3割)でユニットケア実施

□ 1146施設(約7割)が未実施
そのうちの731施設(約6割)が今後導入意向
↓なぜ現在は導入していない?
施設の面積が不足、コスト面で困難

比較

「新しい」
「定員が多い」
「面積が大きい」
「個室率が高い」
「職員体制が充実」
実施率が比較的高い

- ・介護保険のスタートした2000年以降に従来型でも普及
- ・リビング、ダイニングを約6割、キッチンを約4割の施設が全ユニットに設置
- ・全室個室は約1割、多床室の仕切りはカーテンが約6割
- ・増築などの工事の実施は約4割(リビング空間に関する工事が最も多い)
- ・浴室の全ユニット設置施設はキッチンなども全ユニットに設置(浴室は施設内に1つの施設が半数以上)

↓ 効果

- ・利用者、家族、職員に対して「よい効果」評価が多い

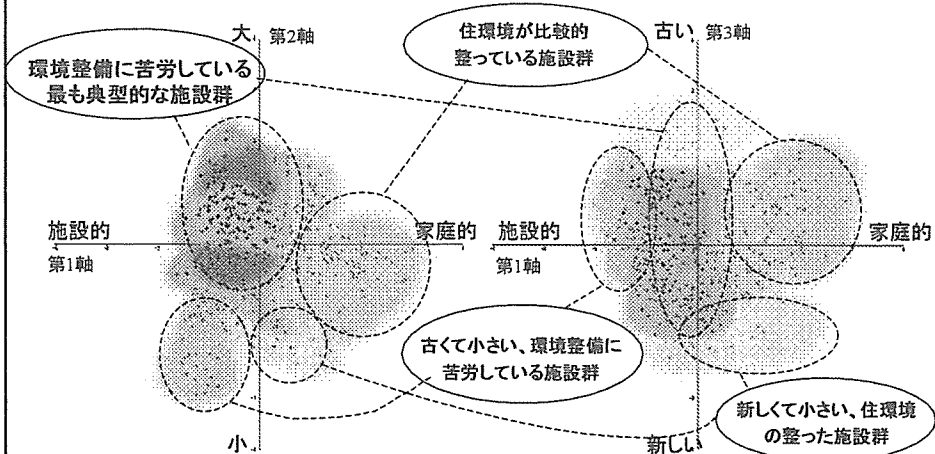
全国悉皆アンケート調査結果

- ・数量化Ⅲ類、クラスター分析を用いて施設を分類(7クラスター)

第1軸:住環境の整備状態(相関係数:0.60)

第2軸:施設の規模(相関係数:0.49)

第3軸:施設の新旧(相関係数:0.46)



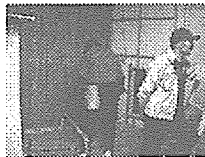
従来型施設のユニットケア先進事例：訪問調査

■ 先進事例訪問施設：30施設

- 大規模工事による環境整備
- 小規模工事による段階的整備
 - キッチン、フロなど場所ごとに工事
 - 職員が大工の役割をこなしての工事
- 気づいたところから、しつらえの整備
 - テーブル・ソファの設置
 - のれん、ついたてによる空間の分節



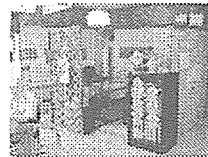
倉庫→リビング



職員による壁張替



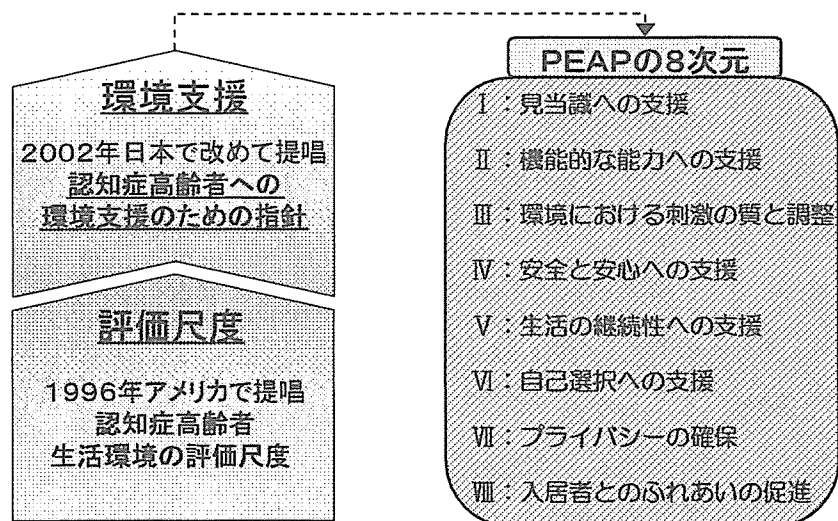
イス・机などの設置



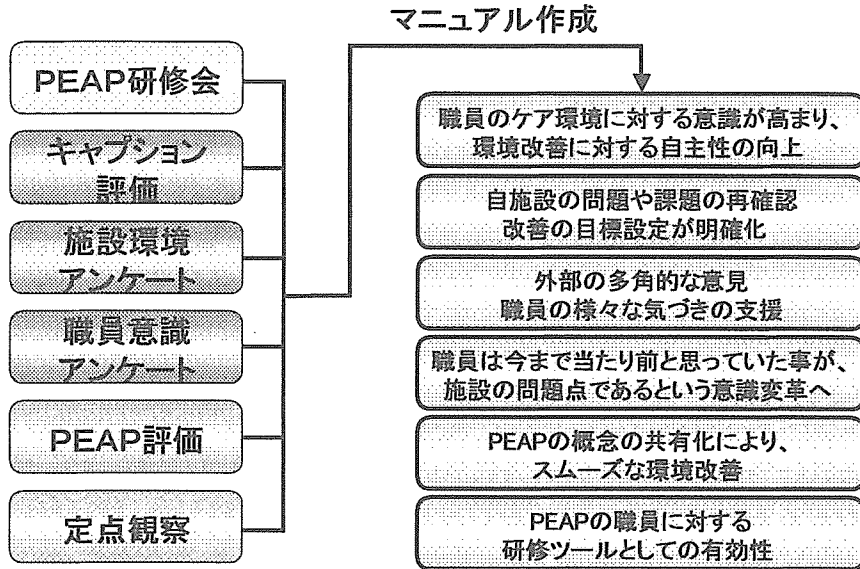
ついたてによる仕切り

環境改善手法の調査(環境支援指針PEAPの適用)

Professional Environmental Assessment Protocol



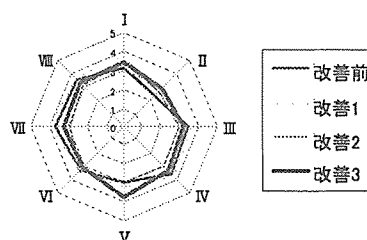
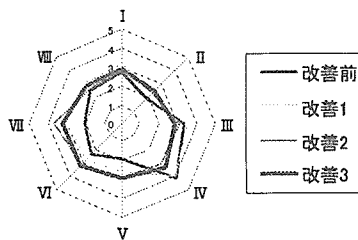
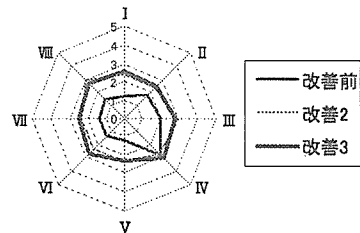
従来型施設のユニット化研修プログラム実施



協力:大阪府社会福祉協議会

PEAPによるアセスメント

- PEAP8次元
- I: 見当識への支援
 - II: 機能的な能力への支援
 - III: 環境における刺激の質と調整
 - IV: 安全と安心への支援
 - V: 生活の継続性への支援
 - VI: 自己選択への支援
 - VII: プライバシーの確保
 - VIII: 入居者とのふれあいの促進



■ 環境改善実施後、PEAP評価は上昇傾向

環境づくりのワークショップ

- ・ 問題意識の理解と共有化(小規模・家庭的環境の創造)
- ・ 施設(幹部、現場職員)と大学(研究者、学生)との協同
- ・ 施設職員への環境への気づき

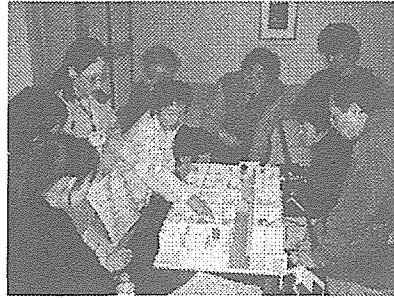


写真1: 職員と協同で改善案を考える



写真2: スケール感のある1/30模型

ケア環境整備実施状況(事例: Ko施設)

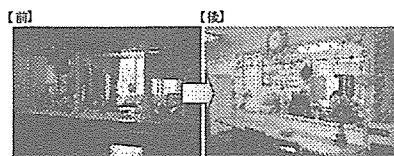


写真7 リビング(元客母室)
・ ガラス窓と扉をとり除き、オープンな要素を創出
・ カウンターの設置

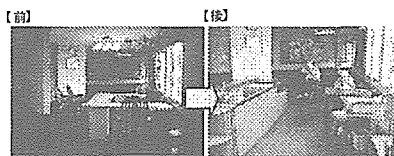


写真9 廊下三角コーナー部
・ 職員と入居者が共にできる行為、ながら作業の増加
・ 入居者の残存能力の維持

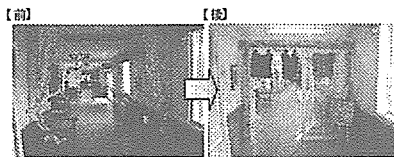


写真8 ユニット境界部
・ 徘徊者の立ち止まるきっかけ
・ 自分のユニットという意識付け

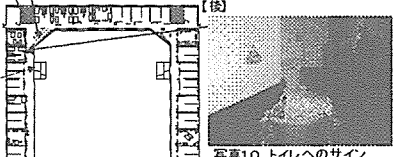


写真10 トイレへのサイン

・ 入居者の視線への配慮



写真11 居室
・ 家族の協力による、なじみの家具の導入

居場所の多様性(選択性、個別性)

関わり状況の変化・介護動線の短縮化

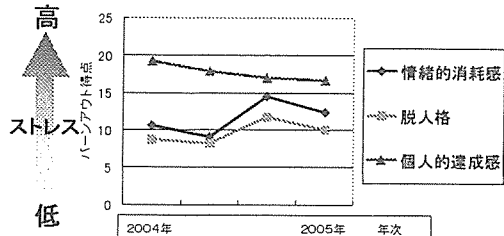
介護職員のバーンアウト調査(MBI尺度)

ユニットケア環境整備前後における
バーンアウト得点の変化

情緒的消耗感(EE)	整備前	(*)
	整備後	t値 2.09
脱人格(DP)	整備前	(-)
	整備後	t値 0.44
個人的達成感(PA)	整備前	(-)
	整備後	t値 0.78

* p<0.10

バーンアウト得点の経年変化



提言

(1) ユニットメンバー等のストレス低減の試み

- ① ユニット主任に若手スタッフを起用 活生化、孤立化防止
- ② 勤務日程の自主管理の進行 柔軟性、自己責任の自覚

(2) 介護スタッフのストレス確認

- ① GHQによる介護スタッフの個別ストレス指導 ストレス確認
- ② ユニット内のサブリーダーの連携強化、流動勤務の試み

結論

従来型特養の実態 : ユニットケア実施施設; 429施設(回答施設の27.4%)

未実施施設: 1146施設(72.8%)
内ユニットケア実施意向有り: 731施設
介護保険見直しの基礎資料の提供

・建築的制約(ユニット化のための十分な面積の確保が困難)
・コストや職員体制の問題

従来型施設のユニット化、環境支援の必要性

ユニット化研修のマニュアル化
PEAP適用による環境改善

- ・職員の意識の啓発
- ・先進事例から学ぶ

環境改善の有効性・効果

- ・生活行動障害の減少・関わりの促進
- ・コスト分析→改善の基礎的資料

継続的改善の重要性

- ・職員のストレスマネジメント
- ・施設の管理体制の充実

学際的知識からの評価

潜在的要求の把握

介護方針の明確化

選択性、定着性のある空間

質の高いケア環境改善(ハード、ソフト)

従来型施設職員のユニット化研修

環境改善の有効性

個別的ケアの実現

Ⅱ. 分担研究報告

■テーマ 1

従来型施設におけるユニットケアの実態と環境改善手法

1. 従来型特別養護老人ホームにおけるユニットケアの実態に関するアンケート調査
主任研究者：足立 啓 (和歌山大学教授)
研究協力者：林 悦子 (東京都老人総合研究所協力研究員)
品川 靖幸 (和歌山大学大学院生)
2. 従来型特別養護老人ホームのユニットケア実践の現状把握と環境改善手法の検討
主任研究者：足立 啓 (和歌山大学教授)
研究協力者：品川 靖幸 (和歌山大学大学院生)
安岡 真由 (和歌山大学大学院生)
郡山 智彦 (和歌山大学大学院研究生)
池本 博行 (IKE 建築環境設計所長)
3. 従来型施設のユニット化におけるコスト事例の検討
分担研究者：池本 博行 (IKE 建築環境設計所長)
研究協力者：足立 啓 (和歌山大学教授)
品川 靖幸 (和歌山大学大学院生)
郡山 智彦 (和歌山大学大学院研究生)